

森戸国際高等教育学院による独自のオンライン・プレースメントテスト 実施に向けた 2019 年度の活動について

名塩征史

森戸国際高等教育学院（以下、本学院）では、各留学生の日本語レベルに応じた日本語授業の提供を目的とし、前期・後期の開始前にプレースメント・テストを実施している。本報告は、2020 年度から実施される本学院独自のオンライン・プレースメントテストについて、その実施に至るまでの経緯と準備段階における活動内容をまとめたものである。

本報告の執筆時（2020 年 8 月）には、既に 1 回目のオンライン・プレースメントテストが実施され、2 回目の準備も進められているところであるが、これらについての報告は、2020 年度の活動報告として次号に掲載される予定である。また、報告者は当該試験の実施・運営を取り仕切る立場にあり、試験問題の作成には関わっていないため、ここでは当該試験の実施にかかるオンライン・システムの構築と運用に関連する範囲に報告をとどめる。

◆ 経緯

報告者が着任した 2018 年 10 月の時点で、本学院のプレースメントテストは「日本語テストシステム J-CAT¹」を利用する形で既にオンライン化されていた。しかし、当時は無償利用が認められていた当該システムが、2020 年度より有償化されることを受け、本学院が独自に実施・運営するオンライン・プレースメントテストの開発に着手する運びとなった。

開発するに当たって最初に問題となったのが、オンラインテストを動作させるための LMS（学習管理システム）についてである。広島大学が全学的な利用を目的として既に設置していた「Bb9」が、原則として既に入学手続きを済ませた学生しか利用できないということもあり、入学予定者を受験者として登録できる LMS を本学院が独自に入手して設置する必要性があった。外部の民間企業が提供する LMS を購入・設置するために大規模な予算も準備されたが、上記 Bb9 が利用可能な状況下で高性能の LMS を設置しても、両者が競合することで結果的にどちらかの機能を無駄にしてしまう恐れがある。そのため、本学院が各学期で受け入れる受験者を 500 名前後と想定した場合に必要な適度な規模の LMS をできるだけコストをかけずに設置する方法が模索されることとなった。こうした条件の下で最終的に採用されたのが、オープンソースの e-learning プラットフォーム「Moodle²」である。Moodle は、本学院の日本語授業での利用を目指し、報告者が着任当初から試験運用を進めていた。Moodle にはオンラインでの課題提出や小テストの実施を可能にする基本的

な機能に加え、SCORM³で書き出された e-learning ツールをアップロードして動作させる機能も備えている。そこで、SCORM での書き出しが可能な市販のオンライン・テスト作成ツールを購入し、作成されたテストを Moodle 上で実施するという形式が採用されることとなった。

システム関連の方針がある程度定まったところで、試験問題の作成を目的とした作業部会（現・プレースメントテスト問題作成委員会）が組織され、2020 年度春からの実施を目指し、まずはプレテストの実施が企画された。以下、プレテストの実施とその結果について報告する。

◆ プレテスト

プレテストは、当該システムを利用した受験者の登録から試験結果の通知に至るまでの各工程における正常動作の確認を主な目的として実施された。実施期間は 2019 年 12 月中旬から下旬にかけての一週間で、調査対象者（受験者）は 2019 年度後期の日本語授業の受講者から募ることとなった。調査対象者は Google フォームを介して受験申請（調査への参加に関する同意確認も含む）を行い、その内容をもって Moodle へのログイン・アカウントを作成した。調査後、受験完了者には、受験にかかる負担と疲労の対価として 1000 円相当の謝礼（Quo カード）が進呈された。なお、このプレテストの実施は、事前に本学院の倫理審査委員会の審査を経て承認されたものである。

最終的な調査対象者の数は以下の通りである。

- 登録者（Moodle のログイン・アカウント取得者）： 93 名
- 受験者（プレテストにアクセスした記録がある者）： 67 名 [うち 4 名が評定なし]
- 未受験者（登録者のうちプレテストにアクセスした記録がない者）： 26 名

◆ プレテスト実施後に明らかとなった課題

プレテストの結果、オンライン・テストは概ね正常に動作することが確認された。しかし、プレテストでは確認できず、本試験実施までの間に検討しなければならない課題も残された。

たとえば、上記の通り、約 3 割の登録者が未受験のままになっていたが、その原因が不明のままである。受験に必要な情報を登録者のメールアドレスに送信していたが、そのメールを登録者が読んでいるかどうかは、送信者からは確認できない。もしこの情報共有がうまくいかなかったことが原因で未受験となってしまっているケースがあったとすれば、本試験では重大な問題に発展する可能性もある。この問題を完全に解決することは難しい

が、受験者に対してより確実に情報を伝える方法を模索する必要があるだろう。

また、Moodle の運用に利用していた Web サーバー用の PC 端末が、受験期間中に何度かカーネルパニック⁴を起こし、インターネットを介してのアクセスができなくなる現象が発生した。後日調査したところ、この現象は当該端末にインストールされている OS に潜在する問題であることが判明した。したがって、この問題は、遅かれ早かれ、OS のアップデートを機に解消されるものと期待されるが、解消されるまでの間は、頻繁にサーバーの状況をチェックする必要がある。特にシステムのフリーズ現象に関連している可能性が高いソフトウェア・アップデートについては、担当者が不在となる休日の前に手動で行い、異常がないことを確認するなどの工夫が求められる。

そのほか、本試験では 500 名弱の受験者を想定しなければならず、今回のプレテストでは問題なく行われた作業工程も、可能な限り自動化することで効率よく進めていく必要があるものと思われる。特に、プレテストでは行わなかったが、本試験では受験後のレベル判定の結果を各受験者に通知する作業がある。このレベル通知をどのように行うかは、今後最優先で検討すべき課題といえるだろう。

注

¹ 2020 年 4 月からは、一般社団法人日本語教育支援協会が運営している。

(<https://j-cat.jalesa.org>)

² <https://moodle.org>

³ “Sharable Content Object Reference Model” の略称。e-learning における共通化のための標準規格。

⁴ OS の中核部分に起きる原因不明の致命的なエラーで、OS が完全に停止するケースが多く、解消にはシステムの再起動を余儀なくされる。